

## ＜翻 訳＞

## デュ・ベレー「老いた遊女」

田 中 聰 子

## 訳者の序

## 作品について

プレイヤー派の詩人ジョアシャン・デュ・ベレーは 1553 年から 1557 年にかけてローマに滞在した。当時ローマにあってフランス王アンリ二世の外交官としての役割を果たしていた一門の権勢家デュ・ベレー枢機卿の下で秘書兼執事として勤めたのである。その間に書きためた詩作品を、帰国後まもない 1558 年の始めに彼は次々と刊行した。『哀惜詩集』<sup>1</sup>，『ローマの古跡』<sup>2</sup>，『田園遊楽集』，そしてラテン語による『ポエマータ』である。ここに翻訳した「老いた遊女」を含む『田園遊楽集』は、この作品の校訂者ソーニエによれば、デュ・ベレーの作品の中では特異なものである。すなわち人々が詩人に与え、詩人自身も自らに与えようとしているイメージから外れている。そのイメージとは「本質的に偉大なもの、崇高なものにとりつかれた詩人」<sup>3</sup> というものであるが、この作品は「何であれ限られた分野の作品にのみ力量を発揮する群小詩人の作品の見本」<sup>4</sup> であるとソーニエは言う。まずこの詩集は種々雑多なテーマを持つ長短さまざまな詩の寄せ集めである。その構成をソーニエに従って示すと次のようになる。<sup>5</sup>

- I 巻頭詩（作品 1 が序，作品 2 が献辞）
- II 翻訳物（作品 3 から作品 17 まで。「田園風」と言う形容にふさわしい内容を持つグループ）
- III 個人的あるいは神話的恋愛詩（作品 18 から作品 28 まで）
- IV バーレスクな作品（作品 29 から作品 33 まで）
- V 反娼婦的詩想の作品（作品 34 から作品 39 まで）

## VI 卷末の詩（作品40）

また詩のジャンルもさまざまである。オード、シャン、ヴィラネル、エピグラム、エピタフ、ブラゾン、サティールなど。つまりクレマン・マロにおなじみのジャンルである。1549年、『フランス語の擁護と顕揚』によって、プレイヤード派は詩の革新のラッパを華々しく吹き鳴らし、マロ派との訣別を宣言した。しかし最初の勇ましさが消え、プレイヤードの名も知れ渡った後で、彼らは「まさしくマロの方へ、詩法の細部において後戻りしたのである——とりわけ息抜きの詩において。」<sup>6</sup>

息抜きの詩、あるいは気晴らしの詩。これがこの詩集の基本的な性格である。デュ・ベレーは序にあたる「読者に」という詩の中でこう述べている。

「この贈り物があるがままに受け取っていただきたい。私がこれを書いたのと同じような時間をこれを読むのに当て、私がこれを捧げるのと同じような気持で読んでいただきたい。それは普通人々が、賭事や芝居や宴会など、費用がかさむ割りに得るところが少ない遊びに当てる時間である。」<sup>7</sup>

重大なる仕事からの息抜き、それこそ「ユマニスト」の肖像の本質的特徴であるとソーニエは主張する。さらに、「1550年以後の詩人は、事実、ヴィヨンに見られた、またもっと後のマロにさえみられたあの闊達さを、すなわちまじめな作品の中であっても、その気になれば、いたずら好きで陽気な調子になれるあの融通無碍な精神をもはや持ちあわせていない。」<sup>8</sup> 詩に権威主義的な概念が押し付けられ、偉大な詩にある種の悲壮さが求められることになって、詩人は常に緊張を強いられる。この笑いを持たぬ礼式としての詩から一時身をかわして気楽な作品を作ろうと思えば、概念上マイナーのものとされるジャンルで詩作し、特殊な作品集として別にしておく必要がある。詩人に気晴らしの作品が必要になるのは、とりわけ、偉大な詩においては詩人にもはや自由がなくなってしまった時である、とソーニエは指摘している。<sup>9</sup>

この詩集の題名は読者をとまどわせる。＜Divers Jeux Rustiques＞とは、文字通りには「田園風のさまざまな遊び」である。しかし「田園風の」という形容にふさわしいのは上に見た通り作品3から作品17までの詩群

で、その他は、ここに訳した詩も含め、田園とは無縁である。しかしソーニエによれば、<jeux rustiques>とは単に、ネオ・ラテン詩人が雑詠集(mélange)の意味で用いた<silvae>などの語をフランス語に直したものにすぎない。<sup>10</sup> この集の性格であるうちあけ話風の親しみ深さや、気楽に作られた作品特有の簡素さ、そしてさまざまなものを受け入れるおおらかさを、この題名は示しているにすぎないのである。言い換えれば各部分がそれほど緊密に結びついていない作品集ということになり、この点で他のローマみやげのフランス語作品、『哀惜詩集』や『ローマの古跡』とは趣を異にする。これら二作品は、その中のどれかのソネを全体から切り離して鑑賞することがないとは言えないにせよ、本来統一ある一個の作品の一部であって、普通そのように読まれるものである。ところが『田園遊楽集』では、中の一つの詩が単独に何度も版を重ねることが実際に起きている。それがここに邦訳を試みた「老いた遊女」であった。

この詩集の出版許可状の日付は1557年1月17日(新暦では1558年)であるが、それからわずか半年後の1558年7月には、リヨンの出版業者エドアール(Nicolas Edoard)が、デュ・ベレーのこの詩をテレンティウス及びヴィヨンのそれぞれの一篇の詩と併せて一冊にまとめて刊行した。タイトルは、『I. D. B. A. 作「ローマの遊女」、テレンティウス作「ポルノグラフィー」およびF. ヴィヨン作で新たに校訂・注解をほどこした「兜屋小町の嘆き」』<sup>11</sup> というものである。デュ・ベレーの全集を校訂したシャマールによれば、この本は稀書で、シャマール自身アルスナル図書館所蔵のものしか知らないという。その後も「老いた遊女」(エドアールは「ローマの遊女」としている)は詩集とは別に、時にはアレティーノの対話と併せ、時にはまた別の作者のものと併せてくりかえし出版された。その出版の時代はシャマールによると、1578年、1580年、1595年、1610年である。<sup>12</sup> このように「老いた遊女」は格別の好評を博した作品として注目に値する。

エドアールの版について少し付言しておく、緒言の中でエドアールは、印刷にあたって多くの間違いを正し、「フランスの素朴な読者の理解を助ける目的で」<sup>13</sup> 欄外に注をほどこしたと述べている。綴りの間違いやテキストの異同の程度から見て、この編者が基いているのは、1558年に

フェデリック・モレルがパリで刊行した『田園遊楽集』——詩人公認の版——ではなく、不正確な手写本であったにちがいないというのがシャマールの推測である。詩人の知らぬうちに作品のコピーが出回っていたことは詩人自身が「読者に」の中で語っている。エドアールはパリの版を恐らく知らず、それどころか作者がデュ・ベレーであることさえ知らなかった可能性もあるとシャマールは言う。<sup>14</sup> 作者名の J. D. B. A. が Joachim du Bellay Anjouvin (アンジューの人ジョアシャン・デュ・ベレー) の頭文字であると知る人は知っていたであろうが。テキストはそのようなものであるが、エドアールの注のあるものは後世の我々の理解を助けるものであるとして、ソーニエ版もシャマール版もその一部を収録している。訳注でエドアールから引いている箇所はすべてシャマールからの孫引きである。

### テーマについて

老婆の肖像は伝統的な文学上のテーマであるが、それが最も顕著に現われるのは、ジャック・ベルベによれば、十六世紀から十七世紀初頭にかけての時期である。「十六世紀および十七世紀初頭の風刺詩における老婆のテーマ」<sup>15</sup> という論文の中で彼はこう述べている。「老婆は、その醜さにより、またその悪行により、そしてペトラルカ風恋愛詩人たちにあれほど輝かしく称揚された若い女性の美しさとの対比により、十六世紀および十七世紀の風刺詩人の注意を特別に引きつけた。」<sup>16</sup> 古代及び中世の詩人にとってはほんのゆきずりの言及に過ぎなかったものが、この時期の詩人たちによって厚みと広がりを持つようになったのである。老婆の肖像のさまざまな側面に立ち入ってみると、まず肉体的には、滑稽かつグロテスクな解剖学的記述、老婆の悪臭や老齡の誇張、死との近縁性などがあり、心理的肖像としては、色狂い、女衒ないし娼婦、魔女ないし災厄の種、偽善者ないし信心家、男の恋情の冷却剤といった側面がある。さらにテーマの扱い方からみると、ひたすらな罵倒がある一方、失われたものを哀惜する老婆を描くもの、すなわち <ubi sunt> のテーマと結びついたもの、また老婆の「復権」をさらに進めてそのポジティブな価値を歌うものまである。それは魅力ある老婆の歌い手ボードレールを予告するものである、とベルベは論文の結びにつけ加えている。<sup>17</sup>

ところでデュ・ベレーには「老いた遊女」のほかにも老婆を歌った詩がある。上に見た諸側面から彼の老婆像を見てみよう。まず 1550 年の『オリヴ』（フランス初のソネットによるカンツォニエーレ、初版は 1549 年）に付せられた 214 行からなる詩「アンテロティック」<sup>18</sup> である。アンテロティックとは愛の主題へのアンチ・テーゼを意味する語であり、ホラティウス、プロペルティウスなどの古代詩人以来の伝統に立つ老婆罵倒の詩である。まず冒頭には老齡の誇張がみられる。

老婆よ、古さでは負けぬ者よ、  
世界を覆った洪水の後、  
豊穡の石の一擲で、  
人類の半ばを生んだ者にも。 (1-4)

続いて詩人は老婆を、「吝嗇」、「妬み」、メドゥーサなど、神話上の存在になぞらえている。その上で老婆と死や冥府との近縁性に触れる。

老婆よ、お前の吐く息は  
ステュクスの淵から出る息に、  
また鉾山から出る息に似る。 (40-42)

また、

老婆よ、あらゆる死の鳥が、  
闇の仲間の鳴く猫が、  
腐肉をあさるからすどもが、  
とうに死人とみなした者よ。

.....

なんと？ それより死の方で  
お前を死の死と思うだろう。 (67-78)

心理的肖像としては、まず女衒ないし娼婦としての側面が暗示される。

老婆よ、まじめな家庭の恐怖、  
老婆よ、若い娘のペストよ、 (47-48)

さらに老婆の色狂いも描かれる。詩人の恋する若い娘が「甘く長い吐息とともに」詩人を「抱きしめるのを見る時」、

お前は私の非を鳴らす。

お前が同じことをしたためだ。

私はお前の神も同然、

お前は私を「いい人」と呼ぶ。 (181-184)

老婆は恋の火消し役でもある。詩人の胸に燃える恋の炎も、

お前を見ては、老いた魔女よ、

一瞬にして、なぜかは知らず、

冷たく凍ってしまうのだ。 (198-200)

老婆を魔女と呼ぶのは、この二つが実は同じものと感じられているからである。

次に「老いた遊女」と同じく『田園遊楽集』の中に収められた「老婆を駁す」<sup>19</sup>を見てみよう。六行詩からなるこの作品の第一詩節には、老齡、汚さ、死との近縁性、狂気、そして「妬み」など寓意的人物との比較が顔を揃えている。

この世よりなお古い老婆よ、

塵芥より汚らしい老婆よ、

「熱病」より青ざめており、

「死」よりもなお「死」に似ており、

「狂気」にまして狂っており、

「妬み」よりなお妬み深い女よ。 (1-6)

続く第二詩節は、老婆の属性である魔女、女衒、信心家、偽善者の勢揃いである。

お前は魔女にしてまた女衒、

お前は偽善者で信心家。 (8-9)

とりわけ老婆はフリアイ（エリニュス）すなわち蛇の頭髪を持ち、松明を手にして罪人を追いかける復讐の女神と結びつけられる。

この界限に、王国に、領土に、

争いをくまなく引き起こすために、

なにもほかのフリアイなど要りはしない。

しかもなお老いたゴルゴーンよ、

しかもなお老いたティーシポネーよ、

お前は妬んではばかりぬ、

わが人生の甘い楽しみを。(16-22)

ここに名の出ているティーシポネーは、アレクトー、メガラと並んで、三人のフリアイの一人であるが、フリアイとしての老婆のイメージは古典から受け継がれたものである。ホラティウスの『風刺詩集』巻一の八には、ローマのエスキリーナの丘にある無縁墓地に、墓場荒らしや鳥を威すために置かれた案山子の語る話として、魔女カニディアとその姉サガナの実行が描かれている。

「魔女たちの一人はヘカテーに、一人は恐怖のティーシポネーに呼びかけはじめるのだった。」<sup>20</sup>

この少し後には「二人のフリアイの叫び声や仕ぐさを…」というくだりもある。このホラティウスの魔女たちは、案山子の立てた音に驚いて逃げ去る時に、入れ歯を落としていく。つまり魔女は歯抜けの老婆である。同じホラティウスの『エポード』第五歌にもカニディアが登場するが、ここでも魔女=老婆フリアイのイメージで描かれている。

「カニディアは乱れ髪に蝮をからみつけた頭で…」<sup>21</sup>

アプレイウスの『金色のろば』冒頭には、はたごの女主人メロエーの話が出てくるが、この女は貪欲な娼婦としての姿をあらわす。

「一度その女のままになってからというものは、憐れにも僕はずっと忌まわしい災を身に受けることになり、まえに泥棒が親切にも着料として残しておいてくれた衣類さえも、その女にくれてやってしまった。」<sup>22</sup>

ところでこの娼婦はまた魔女でもあった。

「神様のような女占者なんだ、そいで、天を呼び降ろし、大地を宙に吊るし、泉を凍て固め、亡霊を地下から起こし、神々を黄泉に送り、星辰の光りを消し、地獄の闇をさえも輝きたたせる力を持っているんだ。」<sup>23</sup>

カニディアのように、またメロエーのように、デュ・ベレーの老婆は墓地を徘徊し、呪術によって人の心を操る。

お前は言う、心得があるのだと、  
魂をとりこにする術も、  
あるいはそれを解き放つ術も。

.....

事実、老いた魔術使いよ、  
私は見たのだ、わが恋人が  
かつてのような優しさを  
もう示さぬのを。… (67-76)

この老婆は確かに魔女の仲間であり、魔女の饗宴に参加する。

時には一人お前は歩む、  
身の毛もよだつ墓地のうちを。  
時には、隠した十字架のまわりに  
髪ふり乱し、招き寄せる、  
魔女が先導するかの舞踏を、  
週の最後にあたる日に。 (97-102)

老婆は魔女として農耕牧畜に被害を及ぼしもする。

お前ゆえに葡萄の木は凍り、  
お前ゆえに平野に霰降り、  
お前ゆえに木々は倒れ、  
お前ゆえに農夫は嘆く、  
なくした小麦を。羊飼いの、  
死にゆく羊を嘆くのだ。 (103-108)

以上に見たようにデュ・ベレーは老婆の伝統的肖像を描いている。すなわち魔女、女衒、娼婦、フリアイ、災厄をもたらす者、偽善者、信心家、恋の火消し役という側面を持ち、妬み深く、醜く、信じられぬほどの年齢で、死よりも死に似た老婆である。テーマの扱い方からみるとただひたすらに罵倒している。しかし彼の罵倒には、ベルベが「バーレスクな解剖学」と呼ぶもの、肉体的醜さの露骨で詳細な描写はごく稀で、ほとんど印象に残らない。彼は老婆の肉体の醜悪さを微に入り細に渡ってほじくり出すことに喜びを見出してはいないのだ。彼の筆がいきいきとしてくるのは「老いた遊女」で老婆の哀惜を描く時である。それはまことに人間的な老婆であって、呪術に頼る時でさえ恐ろしげな魔女の面影を感じさせない。笑いを醸し出しているが、それもあざけりの笑いというよりは共感のこもった



笑いと言ええるものである。あるいは同時代の人々にとってはもう少し軽侮のこもった笑いであったかもしれない。エドアールはこの作品の最後に長い注を、というよりむしろ評論文を載せているが、その中でこの作品が両性にとって有益である理由を述べている。女性にとっては、この老娼婦の身の上話は反面教師として役立つ。不品行がいかに悲惨な結末をもたらすかを教えるのである。一方男性は「肉体的危険も冒さず、財産も失わず、名誉も疵つけず、時間も無駄にすることなく」<sup>24</sup> 欺瞞に満ちたセイレーンたちの手管に通暁することができる。エドアールは有益性という観点からこの作品を讃えているのである。詩人自身もこの「遊女」の口から、この身の上話は世慣れぬ若者には「いい薬となろう」と言わせている。しかし建前はどうかと、共感をこめて老婆の嘆きを描いたのではなかったら、はたしてこの作品だけが特別な好評をかちえるということになったであろうか。ともあれ現代の我々は教化的側面を全く認めなくてもこの作品を面白く読むことができる。ベルベも述べている、「娼婦の真のサティール、そして風俗のスケッチを我々に与えるのは…<老いた遊女>である」<sup>25</sup>、と。さらにまた、「この過去への遡及、失われた美のこの追憶は老婆の心理的肖像に感動的要素を持ち込む。それは老婆の性格のこの上なく汚らしい側面とくっきりとしたコントラストをなすものだ」<sup>26</sup> とも彼は書いている。事実、過去の哀惜というテーマにおいて、「老いた遊女」はヴィヨンの流れを汲むものである。直接にはアレティーノの有名な対話『ラジオナメンティ』を典拠としており、娼婦の暮らし振りや手管などはこれを大いに取り入れている。しかしアレティーノの娼婦はもっと明るくたくましい。彼女は勝ち誇るような哄笑を響かせる。デュ・ベレーの遊女はむしろあの老いた兜屋小町に近い。ヴィヨンの老娼婦は嘆く。

ああ、幸福な昔にはどんな女で妾はあったか、  
どんな女にそれがなったか、つくづくと考えながら、  
裸姿のわが身を眺めて、  
貧相に、干乾びて痩せ衰えて、縮かんで、  
変わり果てたこの肉体をじっと見る時、  
気も狂ふばかりに、妾はええ腹が立つ。<sup>27</sup>

この嘆きにデュ・ベレーの遊女はこだまを返す。

ああ、何という身の変りよう、

.....

今ではだれもが私を蔑み、

ついてくるのは貧乏ばかり。

かつては見下していた人々が

私を婆あと呼び馬鹿にする。

私に言い寄っていた人々は

口笛吹いてどっと笑う。

私を求めたのが恥ずかしいのさ、

見る影もない私を見ては。 (501-516)

ここにはまた笑いがひそんでもいる。普遍的な老婆の姿を写實的に描く時にそれはいつそうはっきりと感じられる。

もはや匂いもなく味もなく、

柔らかな音しか聞きたくもない。

.....

今ではただ嘆くこと、呪うこと、

また咳込むこと、痰を吐くこと、

人を怒らせ、人に怒ること。 (475-484)

この笑いはデュ・ベレーが『哀惜詩集』の中で「サルデーニャの笑い」<sup>28</sup>と名付けたもの、苦笑い、泣き笑いの類である。取り立ててどことも言えなくとも作品の全体にそれはただよっている。それはアレティーノの娼婦の哄笑でもなく、「バーレスクな解剖学」によって老婆をあざける笑いでもない。この作品で老婆の像は等身大になり、人間的厚みと同時に血の通う肉の痛みを持つことになったのである。

---

底本には次のテキストを使用した。JOACHIM DU BELLAY / ŒUVRES POÉTIQUES / V / RECUEILS LYRIQUES / DE 1558, 1559 ET POSTHUMES /

(Divers Jeux Rustiques, Epithalame, Poésies diverses )/EDITION CRITIQUE  
/PUBLIEE PAR/HENRY CHAMARD/PARIS, LIBRAIRIE NIZET/1983.

併せて次のテキストも参照した。JOACHIM DU BELLAY/DIVERS JEUX  
RUSTIQUES/Edités par/V. L. SAULNIER/Nouvelle édition augmentée/  
GENEVE/LIBRAIRIE DROZ/1965.

# 注

1. 『中京大学教養論叢』第23巻第2号, 同第3号, 第24巻第1号, 同第2号に拙訳掲載。
2. 同誌第29巻第2号に拙訳掲載。
3. 4. *Divers Jeux Rustiques*, édit. par V. L. Saulnier, Introduction, p. IX.
5. ソーニエは巻頭の二篇を作品番号に数えているが, シャマールは数に入っていないので, 両者の番号にずれがある。「老いた遊女」はソーニエ版では作品38, シャマール版では作品36である。
6. Saulnier, Introduction, p. XLI.
7. Au lecteur. J. D. B., *Œuvres poétiques*, éd. Chamard, t. V, p. 4.
8. Saulnier, Introd., p. XVIII.
9. Ibid.
10. Ibid., p. XIX.
11. LA/COURTISANE/ROMAINE,/PAR I. D. B. A./LA PORNEGRAPHIE/TERENTIANE,/ET/LA COMPLAINTÉ DE LA BELLE HEAVMIERE,/En elegantes contremises de ieune Beauté et vieille/Laidure: iadis composée par M. F. VILLON,/et de nouvel reveüe, corrigée et interpretee./A LYON,/CHEZ NIC. EDOARD/1558/AVEC PRIVILEGE.
12. Chamard, Avertissement, p. VI-IX.
13. Ibid., p. VIII.
14. Ibid., p. VIII-VIII.
15. Jacques Bailbé, «Le thème de la vieille femme dans la poésie satirique du seizième et du début du dix-septième siècle», *B. H. R.*, XXVI, p. 98-119.
16. Ibid., p. 118.
17. Ibid., p. 119.
18. «Antérotique», *Œuv. poét.*, éd. Chamard, t. I, p. 127-136.
19. «Contre une dame», *Œuv. poét.*, éd. Chamard, t. V, p. 128-133.
20. 鈴木一郎・ホラティウス「風刺詩集」, 世界文学大系67, 『ローマ文学集』, 162頁。
21. Canidia, brevibus implicata viperis/crines et incomptum caput.

( Horatius, *Epodon*, V, 15-16)

22. 呉茂一訳・アプレイウス『黄金の驢馬』, 世界文学大系 67, 『ローマ文学集』, 7 頁。
23. 同上, 7-8 頁。
24. J. D. B., *Œuv. poét.*, éd. Chamard, t, V, p. 181.
25. 前掲論文, 113 頁。
26. 同上, 115 頁。
27. 鈴木信太郎訳『ヴィヨン全詩集』, 岩波文庫, 86 頁。
28. un riz Sardorien. 『哀惜詩集』, ソネ 77, 14 行。

## 老いた遊女の嘆き

わが身を襲った不運をいまさら  
嘆いてもせんないことながら、  
また遅れて来る悔恨を  
理性の罪にもできないけれど、  
それでも嘆こう、性懲りもなく、 [5]  
昔の悔いをくりかえして  
(二度とは悔いを重ねぬと  
確かに約束したものの)。  
苦痛を少しでもなだめるため  
せんない吐息もつくとしよう。 [10]  
思うに私の繰り言から  
教訓ひき出す人もいよう。  
私の憂き目をつぶさに聞けば  
おぼこには良い薬ともなろう。  
こうする功德で昔の罪を [15]  
償うほかない私だから。  
わが身の悲運を物語る  
手始めは、歳が分別よりも  
早く長じて、十二か十三、  
ふしだらな母の手元で育つ [20]  
軽はずみな娘に味わせる  
快樂の味に育まれ、  
手折られぬまま老いるよりもと、  
わが初花を摘ませたのが、  
まだしもりっぱな殿御であれば、 [25]  
わが身の恥も救われように、  
卑しい下僕が初咲きの  
名誉を手に入れ、そしらぬ顔。  
それというのも世慣れた母が

ことを内々に済ませたため。 [30]

まもなく今度はローマの貴族の

二、三人の手に渡ったが、

そのたび処女のやり直し。

そうふれこんで売りつけた。

その後もさらに手から手へ、 [35]

もう五、六度は処女として。

次いで最善の道を取り、

偉い坊さまの囲い者に。

処女の値段をたっぷりと

はずんでくれて、厚いもてなし、 [40]

みるみる私は磨きあげられ、

花も見頃の美女となる。

歌に踊りにリュートも弾けば、

品よく話す術も身につけ、

服の着方や、肌の色を [45]

きれいに見せる化粧も覚えた。

つまりはたくみな指導のもとで

諸芸の初歩を身につけたのさ。

この坊さまが、愛人であり、

心の半分でも心でもあり、 [50]

すべてでもある若い私の

気に入ろうと夢中であったため。

こうして暮らしたのが二、三年。

そのうち暮らしを変えたくなくて

やもたてもない。よくあることで、 [55]

楽しみも極めれば当たり前、

少しは気にそまぬこともなきゃ、

人間、極楽がいやになる。

ああ、本当に、威厳と恋は

相容れぬもの。欠けていたのは [60]

自由だけだが、これがなくては  
残りは取るに足りぬこと。

愛され大切にされることも、  
指輪も鎖もりっぱな衣装も、

百人の従僕にかしずかれ、 [65]

殿様方にちやほやされて、  
安楽に暮らしていただけることも。

一旦ほかに目が向いたら、  
どんなに機嫌をとられてみても、

私の不満はおさまらぬ。 [70]

存分におしゃべりを楽しんだり、  
仮面に仮装で出歩いたり、

格子窓から夜口笛を吹き、  
恋をし、気まぐれに生きること。

下僕のお伴やあるじの許可が [75]

なければ、家を出ることも  
窓からのぞくこともかなわぬ  
窮屈な牢にしばられぬこと。

そのことばかりを恋いこがれ  
そのことばかりに寝もやらず、 [80]

ふさぎこんでは日を暮らすうち、  
さすがの若さも色あせる。

これを見て私のパトロンは  
世間体よく手を切るため、  
内々に私の相手を探す。 [85]

富も家柄も自慢できぬが、  
気立てのよさとしとやかさ、  
とりわけ貞節は保証つき、と。

まんまと餌にかかった若者、  
ローマの手口に暗いもので、 [90]

掘り出し物よと喜んだが、

正体知ってじたんだ踏む。  
最初は手荒なまねもしたが、  
次には知恵をはたらかせ、  
憎しみは胸におし隠して [95]

甘い言葉に優しい目つき、  
拝んでみたり口説いてみたり、  
そのくせ脅しを利かせたりが  
功を奏して日も経たぬうち  
自分と私との支配者に。 [100]

ドレスに宝石、家具その他、  
私の簞笥の金目のもの、  
現金も貸し金の証文も  
後得資産として取り上げた。  
あげくの果てに旅支度、 [105]

私のりっぱな亭主殿は  
一言もなくローマを去り、  
王様の家来になったとか。  
まもなく死んだと聞いたきり、  
なしのつぶてさ。おかげで私は [110]

大した暮らし、後ろ楯もない。  
不幸にも坊さまは死んでたから。  
私に残った宝といえは、  
ただ若さだけ、こうとなれば、  
自分でパンを稼ぐしかない。 [115]

恥も外聞もなく開業したが、  
前より知恵もついていて、  
上手に商品を売ったので  
抜け目ない客もころりと参り、  
じきに私は評判となる。 [120]

ローマで十分知れわたると、  
辻君でいることもあるまいと、



二、三人だけ旦那に待った。

一番確実な愛人というわけ。

月々のお手当てにもらったのは [125]

一人が普通三十エキュ。

詳しい話はやめておくが、

どんなにうまく捌いたことか。

一人の男にはおだての一手、

別の男にはつれない仕打ち、 [130]

それぞれの気性をのみこんで

答と飴とを使い分けた。

忘れちゃいない、むくれる男を

見え透いた言い訳でまるめこむ

月並みな手も。誰にも惚れず、 [135]

平等にやきもきさせたから、

誰もがわれこそと思ひこみ、

旦那でいたさに贈り物を

山とよこすが、その見返りは

モトがかかるほど少ないもの。 [140]

男の一人と手を切るよう、

二人が迫ったのはもっけの幸い。

たまたま一人を追いつめるために

二人の足並が揃ったわけで。

私の答えは、あの醜い [145]

顔も赤毛も下品なしぐさも

死ぬほどいやだと思っているが

居なくちゃひと月が暮らせぬ、と。

そこで二人は私にただで

好意を求めたことを恥じ、 [150]

機嫌をとろうと、折半で

費用は持とうと折れて出る。

こうして実入りは減らさずに

一人分空きができたわけで、  
これを無駄にする馬鹿じゃない。 [155]

二人の前で金を借りたり、  
借金のあるふりをしたり、  
つまりいくらでも二人から  
おあしを巻き上げる手はあった。

時には尼になると見せかけ、 [160]  
時には結婚をほのめかし、  
時には旅に出ると言う。

ナポリ、ヴェネツィア、またどこなりと。  
だからもうすぐお別れね、と。  
また妊娠のふりもすれば、 [165]  
熱病に罹ったふりもする。

思いつく限りの手を打ったのは  
値段をつり上げ、じらすため。  
これが固定客のあしらい方、  
的を外したためしはない。 [170]

証拠に、金の指輪に耳輪、  
頭巾に鎖、香水しませた  
手袋、ドレス、踵つきスリッパ、  
スカート、薄物、シャマールにスカーフ、  
豪華なベッド、金色の皮、 [175]

ナポリの石鹼、紅おしろい、  
鏡に、私を描いた絵、  
仮面に、御馳走、行き来の馬車、  
まだまだお金のかかるものが  
あれば何でも思いのままに。 [180]

この上何を？手はいくらでも。  
というのも店で売っているものは  
ただで買えたし、肉屋の払いも、  
大抵は肉ですませたから。

人夫にさえも（白状すれば） [185]

現金で払いはしなかった。

りっぱな<sup>ア</sup>愛人<sup>ミ</sup>からもらう金は  
手もつけず銀行に入れたのさ。

おまけに週のうち一晩は

空きを作って、手筈ととのえ、 [190]

新手の客の相手をした、

ただの一日も無駄にせずに。

女中を雇ったのはそのためで、

世慣れたローマの婆さんだったが、

羽根飾りの若者を見つけると、 [195]

私の正体知られぬうちに

段取りつけて手引きする、

こっそりと、また抜け目なく、

前金取ることも忘れない。

その口上に私はローマの [200]

名門の出で、貴族の妻だが、

夫はローマを追放の身だ、と。

こうして外国人を騙したもののさ。

ただ何よりも恐れた危険は

詐欺師で、一度は騙されたが、 [205]

二度とはこけにされるものか。

そこで狙いはスペイン人より

むしろ鷹揚なフランス人に。

おとなしく、慇懃で、情もある。

またベストより嫌ったものは [210]

金離れの悪い若造で、

何かといえば色男ぶり、

花代のかわりに芸を見せる、

歌にリュートにオーバード、

こういう手合いに騙されると [215]

両手は空っぽ、くたびれ損。  
さらに私はよく気をつけた、  
体に一点の汚れもつけず、  
飲むのも食べるのも控え目に、  
よい匂いをさせ、人前でも、  
寝間でも清潔を保つよう。

[220]

オレンジ水、じゃこうに龍涎香、  
白いリネンに羽毛の扇、  
匂い袋も欠かさず寝間に。

とりわけ用心していたのは  
(化粧する女の例にもれず)

[225]

起きぬけの姿を見られぬこと。  
つまりアレティーノの教えはすべて  
心得ていたし、彼の本の

秘訣はすべて実践もした。

[230]

眠れるウェヌスを目覚めさせる  
秘術はほかにも幾千と。

それでいて言葉はしとやかに、  
誰にも手放しの歓迎はせず、  
誰にでも控え目な好意を示し、  
誰とも共通の話題を持つ。

[235]

こうして安全確実に  
売り値をしっかりと上げた。  
言葉たくみに貞節を語り、  
いとも見事に猫をかぶって、  
口から出るのはきれいごとだけ、  
言葉はうぶに、床では大胆に。

[240]

みだらな話がその行為より  
嫌われるのは世のならい、  
貞節ほど喜ばれるものはない。  
あるいは貞節の似姿ほど。

[245]

誰しも愛されれば気をよくする。

あるいは何か美点に気づく。

そして女は愛する値打ちが

無いと言われたら、それでおしまい。 [250]

だからこそ貞節を大事にする、

心はともかく顔だけでも。

こうしてローマで成功を見た。

私を口説いたと言われぬうちは、

色好みと世間が認めぬほどに。 [255]

また許可状も身につけずに

夜昼平気で出歩けた。

免税の特典を得ていたから。

うるさい総督も巡査長も

乱暴なお巡りも怖くなく、 [260]

牢にぶちこまれるのも怖くない。

ザヴェラ法廷でもノナの搭でも。

わが家に通う枢機卿なり、

大領主なりの後ろ楯を

ぬかりなく手に入れておいたから。 [265]

おかげで私は一目置かれ、

誰もが私に気を遣う、

お偉方に守られているのを見て。

こうした暮らしが六、七年。

女盛りを楽しく過ごした [270]

(甘みはちょっぴり、苦みはたっぷり、

これを楽しくと言えるのなら)。

何という楽しみであったことか。

右に行こうが左に行こうが、

恥ずべき肢体を欲望の [275]

おもむくままに任せたことは。

あるいは獣の生き方まねて

恥ずべき金を稼いだことは。  
怒った愛人<sup>ア</sup>のはてしない  
悪口雑言に耐えたことは。 [280]

脇の下の汗や、臭い鼻、  
臭う口にも茶番にも耐え、  
ことあるごとにやきもち焼かれ、  
食事も休みもふいにしたのは。  
おまけに（永遠の刳罰さ） [285]

梅毒の、脱毛の恐怖まで。  
この商売を長く続けて  
受け取る遺産は何もかも。  
そのほか誰もがする苦勞、  
おしろいつけたり、金髪にしたり、 [290]  
髪を縮らせたり、臭いを消したり、  
肌を締め付け、血を温めるなど、  
言うまでもない、ローマ女なら  
今でも当たり前<sup>ア</sup>の苦勞だから。

ああ、3 倍も 4 倍も幸せだ、 [295]  
そんな苦勞の要らぬ人は。  
ある年の聖週間のことだった、  
聖なる悔悟がわが良心を  
ひたしたのは。説教の最中に  
良き霊を私が感じたのは。 [300]

考える間もなくたちまちに  
心を決めた、変身しようと。  
淫らな衣装は脱ぎ捨てて  
敬虔な浄衣に身を包もうと。  
その通りにして、修道女に。 [305]  
持てる財産の大部分を  
み教えのため寄進して。  
ところがすぐに気が変わり、

そんな柄ではないと悟る。

身なりを変えたにすぎないと。 [310]

神に仕えるには役不足と、

さっさと聖所を逃げ出して

もとの古巣にまっしぐら、

悔やんだことを悔やんだ次第。

こうしてもとの稼業に戻り、 [315]

僧院に置いてきただけのものは

稼ごうと悪の学校開く。

前にもまして知恵を絞り、

得意の毘を仕掛けては、

愛の戦の小手調べ、 [320]

客を犠牲に取り戻す、

なくした分におまけをつけて。

結果は大した評判に。

お偉方からちやはやされて

思い上がったそのあまり、 [325]

悔りがわが身にはね返る。

言うまい、最初の幸運も、

名高い三十一の不名誉も、

貴族の代わりにベッドに居た

ローマの首切り役人のことも。 [330]

お楽しみの後では、この男、

公開の笞刑で償ったが。

言うまい、梅毒の腫れ物も、

恥ずべき抜け歯も脱毛症も。

傷跡だらけの私の顔は [335]

どんな厚化粧も誤魔化せぬ。

それでもお客には恵まれて

店じまいなどしなかった。

昔鳴らした評判と

これまで築いた財産が [340]

支えともなり、洗練された

ものごしが衰えた容色を

りっぱに補い、私の秋を

よそ目には夏と思わせたから。

ベッドでの遊びには通じていたし、 [345]

洒落や睦言も限りなく。

踊りも上手といわれたもの。

リュートも人並にたしなんだし、

楽譜を読むのもいささかは。

声はさながら天使の声、 [350]

またペトラルカを歌わせたら

私の右に出る者はない。

その上りっぱな腕もある、

リネンのことも漉し布のことも。

それには好んで時間をかけた、 [355]

ほかによい気晴らしの無い時は。

ある時は華麗に男装して

ローマの町をねり歩いた。

馬には美々しい馬具をつけ、

帽子には羽根をゲルフ流に。 [360]

その凛々しさはマルフィーズにも

ブラダマントにもひけは取らぬ。

つまりは何でも少しはかじり、

ゲームもいささかはたしなんだ、

将棋も、カードのプリム遊びも。 [365]

損をすることはまずなかった。

損だけ引き受けてくれる男と

半々で金を賭けていたから。

ある時はゲームに加わらず、

本業に抜かりはなかったから、 [370]



人が賭金を稼ぐたびに  
そのおこぼれにありついた。  
ある時は気に入らぬ宝石を、  
元値にかなりの利益を見込み、  
五人か六人に買い取らせ、 [375]

ラッフルの賭金に充てたものさ。  
こうして無数のりっぱな手段で  
私の羊から刈り集めた、  
この羊の毛を刈り取ったり、  
あの羊の皮を剥いだりして。 [380]

手練手管に長けていたから  
貪欲な様子は毛ほども見せず、  
私が物を受け取る度合いで  
好意が計れると見なされた。  
そこでわが家は以前にまして [385]

客が集まり、礼儀作法の  
学校さながら、ご婦人方との  
交際学ぶに欠かせぬ場所と。  
洒落が飛び交い、笑いが湧けば  
どんな馬鹿でも名句を吐こうと [390]

しのぎをけずる、夜昼となく  
あらゆるものが褒美に出されて。  
何でもまともな集まりには  
欠かさず出掛けていったもの、  
出た御馳走にどれかの料理が [395]

欠けたためしは一度もない。  
ドゥカート金貨は離れた所に。  
金庫で眠っちゃいなかったのさ。  
りっぱな家に豪華な家具を  
季節に合わせてしつらえさせ、 [400]  
戸口の銘には「アクリシオスの

娘ダナエーの金の雨」 と。  
これでやんわり示したつもり、  
黄金のみが扉を開く、 と。  
どんなにか、 ああ、 よかったらうに、 [405]  
クピドーが愛の松明を以て、  
これまで多くの愛人<sup>ミ</sup>たちに  
私を与えた仕打ちを懲らし、  
その残酷な復讐の火で  
冷たい私を燃やさなかったら。 [410]  
おかげで不遜な若者を  
この目と心より愛するはめに。  
男の邪険さを和らげようと  
こちらが優しくすればするほど、  
逃げては、 私の悲しみと [415]  
涙をむごくも見て楽しむ。  
いくたび嫉妬に狂っては  
マイナデスのようにかけめぐり、  
人目も恐れず追ったことか、  
心を奪ったあの人でなしを。 [420]  
いくたび夜長を寝もやらず、  
よその女の腕に抱かれた  
裸の足や首を思って  
窓や扉を壊したことか。  
私の敵をかくまっている [425]  
女をさんざん呪いながら。  
いくたび占師を訪ねたことか、  
いくたび魔女を訪ねたことか、  
魔力で縛って引き止めようとて、  
これほどの武器も効かぬ相手を。 [430]  
今も恐怖に髪が逆立つ、  
狂気の時に何をしたかを

思い返せば。時には墓地の  
闇から孤独な霊を引きだし、  
時には天の月を血で染め、 [435]  
時には川の流れも止めた。

呪文の言葉に、天の兆、  
ポワン・クプレに魔術の図形、  
聖なるつむに、魔力を持つ名、  
死人の骨に、焚く月桂樹、 [440]  
若駒の額から取った薬  
狼の目に、ろうの人形、  
封じた結び目、また三の数、  
月と呼ばれる禍も。

つまりその道のあらゆる術を [445]  
(全ては無駄さ) 試してみた。  
ばかりか、愛を買うために、  
盛りの時に苦勞して  
築いた財産何もかも、  
家屋も葡萄畑も証文も、 [450]  
一年足らずで売りはらい、  
御馳走に贈り物にと消え去った。

あの恩知らずめ、恩知らずめ。  
ありったけの愛をひきつけて、  
絞るだけ絞ると私を捨てた、 [455]  
愛したのは取り上げたものだけ、と。

身の上話の締めくくりは  
女の一番恐れるもの、  
杖にすがって歩を運ぶ  
白髪的女、「老齡」さ。 [460]

何でも盗むその指に  
私の最後の若さもとられ、  
残ったものは腎結石、

足に通風，手には瘤，  
胸に咳，頭には頭痛癖， [465]  
聞こえぬ耳に耳なりの音。

自慢の髪も見ろ影なく，  
花の顔も色あせて，  
死人さながら，蒼い唇<sup>くち</sup>  
へりには死の影が浮かんでいる。 [470]

恋の灯ともしたきれいな目も  
日差しを恐れてひきこもり，  
おのれの罪と私の苦悩を  
嘆く涙の泉に変わる。  
もはや匂いもなく味もなく， [475]

柔らかな音しか聞きたくもない。  
分別は消え，精神は去る，  
肉体が老いを知る，それ以上に。  
かつて覚えたリュートも歌も  
今ではすっかり忘れはて， [480]  
洒落で笑わせたのも遠い昔。

今はただ嘆くこと，呪うこと，  
また咳込むこと，痰を吐くこと，  
人を怒らせ，人に怒ること。  
暮らしを支える仕事といえは， [485]

糸を紡いだり，洗濯したり，  
わずかなぼろ布を商ったり，  
おしろい，化粧水を調えたり，  
祭りの日には果実，香草，  
ろうそく売りに，菓子呼び売り。 [490]

こうして日々のパンを得る，  
老いの身の飢えを充たすため，  
また部屋代を払うため。  
今ではこれが一番かさむ。

そのほか細かいことはここに [495]

語るまい、悲しみも気苦労も、  
また年寄りが胸に秘める  
猜疑心も。何より辛いことは、  
百度も死ぬ思いがすることは、  
死にたいと思うのに死ねないこと。 [500]

ああ、何という身の変わりよう、  
若く、美しく、裕福だった  
私は騎乗の華やかな  
廷臣の一団に取り巻かれ、  
どこかの姫君の行列さながら、 [505]

朝にはミサへと出掛けたし、  
夕べには、私の気が向けば、  
舞踏会へと出掛けたものを。  
今では誰もが私を蔑み、  
ついてくるのは貧乏ばかり。 [510]

かつては見下していた人々が  
私を婆あと呼び馬鹿にする。  
私に言い寄っていた人々は  
口笛吹いてどっと笑う  
私を求めたのが恥かしいのさ、 [515]

見る影もない私を見ては。  
人生の旅もここまで来た。  
辛い日もあればいい目も見たが、  
それでも、悲しいかな、そんなことは、  
一番辛いこととは言えぬ。 [520]

ただひとつ苦い嘆きの種は  
貧しくしかも子持ちであること。  
それも自分で稼げるほどの  
頼りにできる息子ならともかく、  
まだいたいけな娘ときては、 [525]

ただの重荷さ、先々までも  
そうだろうよ、この非道の星が  
長くローマを治めるかぎりは。  
時代の喜び、レオも見たし、  
同じ血筋のクレメンスも、 [530]  
ファルネーゼ家の最初の誉れ、  
善き老パウルスも私は見た。  
次いでユリウス三世となり、  
今じゃお偉いパウルス四世。  
前の方々はまあよいとして、 [535]  
今の教皇にはもの申そう。  
苛烈な掟の暴威のもとに、  
愛の自由をふみにじり、  
ローマを偉大にしていたものを  
禁令を以て廃したことを。 [540]  
もしもローマがちやほやする  
廷臣そのほかのお偉方の  
楽しみを取り締まるというのなら、  
どんな外国人が寄り付こう？  
みな逃げ出すか、最後の手段と [545]  
ガニュメデスの愛に走るだろうよ。  
さもなきゃ法を逃れることを  
主義とする利口な連中ばかり。  
おお、時よ風俗よ、不吉な年よ、  
暗い治世よ、不幸なローマよ。 [550]  
足りぬというのか、内輪もめが  
お前を世界の餌食と化し、  
ラティウムの岸にかくも長く  
戦と飢餓とを見ただけでは？  
その上不幸にも失ったとは、 [555]  
自由を。何より惜しむべき自由を。

お前が惜しむ古い館の  
塵にまみれたあの遺骨よりも。  
娘よ、この目より可愛いお前、  
天はお前をなぜ生んだのか、  
このような世に？なぜ私は  
ながらえてお前の不幸を見るのか？

〔560〕

決っているのに、その金髪も、  
きれいなその目も、紅の色も、  
額も、鼻も、神々しい口も、  
神々にふさわしいその体も、  
餌食になると、廷臣ならぬ、  
人夫か卑しい職人の。

〔565〕

ではそのためか、手塩にかけて  
お前を育てたのは、哀れな子よ、  
乙女の花を卑しい手で

〔570〕

散らすのがお前の定めとは。  
花の若さとはこんなものか、  
老後の杖とも頼んだものを。  
昔の苦勞がいつかは受ける  
報いとはこんなものなのか。

〔575〕

おお、むごい天、不吉な星よ、  
私の苦勞がまだ足らぬのか、  
娘の内に、老いたわが身に、  
あの苦しみを再び見るとは。

〔580〕

もう話せない、川となって  
あふれる涙が言葉を止める。  
今は祈ろう、これを読んで、  
(おそらくは) この涙を笑う方々、  
どうかお許しを、くどくどと、  
(この年の女の悪い癖で)  
身の運・不運を語ったことを。

〔585〕

終わりにしよう、この苦しみから

逃れるために何ができる、

涙も生涯も終える以外に？

[590]

# 訳注

- 7-8 行 約束とあるのはこの詩の直前に置かれた “Contre-repentie” (反悔悛者) という詩の最後の二行を指している。

Je vous délaisse, et promez ne sentir

D' or'enavant un autre repentir. (145-146)

「おさらばしよう、この先二度と

悔いは重ねぬと約束して。」

- 14 行 Aux moins rusez pourra servir d'exemple.

「おぼこ」と訳した <Aux moins rusez> は女性複数ではなく、男性複数である。ヴィヨンの兜屋小町の「バラード」は後輩の娼婦に対する先輩の忠告として、若いうちが花、と教えているが、ここでは娼婦の危険についての世慣れぬ若者のための教訓である。『哀惜詩集』の中でも詩人は次のように歌っている。

O quelle gourmandise ! ô quelle pauvreté !

O quelle horreur de voir leur immondicité !

C'est vraiment de le voir le salut d'un jeune homme.

(sonnet 90, 12-14)

「おお、何という貪欲、何という貧しさ。

その汚らわしさを見ることの、おお何という恐ろしさ。

確かに彼女らを見ることは若い男には薬だろう。」

- 34 行 この箇所のエドアール（「訳者の序」参照）は <Pucelage feint. Art de Celestine> (処女詐称。セレスティーナの術) と注記している。シャマールはこれを解説して、セレスティーナとは、1499年に出版された Fernando de Rojas の喜劇 *Celestine* の主人公で老いた女術であるとしている。またこの喜劇はデュ・ベレーのこの詩集が刊行された 1558 年よりも前にスペイン語からイタリア語に、イタリア語からフランス語に翻訳されていた、と。

- 38 行 高位の僧がローマの遊女を寵愛するさまをデュ・ベレーはローマに居て見聞きし、『哀惜詩集』にも歌っている。

Celuy qui par la ruë a veu publiquement

La courtisanne en coche, ou que pompeusement

L'a peu voir a cheval en accoustrement d'homme



Superbe se monstrier: celuy que de plein jour  
 Aux Cardinaux en cappe a veu faire l'amour,  
 C'est celuy seul (Morel) qui peult juger de Rome.  
 (sonnet 131, 9-14)

「ただこの町の往来を娼婦が人目もはばかりず  
 馬車で行くのを目にした者、また絢爛と華やいで  
 男の服装に身を包み、娼婦が馬にまたがって  
 現われるのを目にした者、また白昼に堂々と  
 マント姿の枢機卿に戯れかかるのを目にした者、  
 (モレルよ) そういう者だけがローマを判断できるのだ。」

43 行 当時の高級娼婦としてのたしなみ。『哀惜詩集』にも言及がある。

Baller, danser, sonner, folastrer dans la couche  
 (sonnet 92, 9)

「踊りに、歌に、演奏に、寝床の中ではしゃぐこと」

49-50 行 Car le prelat, duquel j'estoy l'amie,  
 Voir duquel j'estoy l'ame demie  
 この「心の半分」という常套句はホラティウスを典拠とする。  
 navis, quae tibi creditum  
 debes Vergilium; finibus Atticis  
 reddas incolumen, precor;  
 et serves animae dimidium meae. (*Carmina*, I, iii, 5-8)  
 「船よ、願はくは、汝に託せられたる Vergilius を、Attica の  
 土地へ安全に運べよ、而して私の心の半分を救えよ。」(田中  
 秀央・落合太郎編著『ギリシア・ラテン引用語辞典』, 岩波書  
 店)

59-60 行 O combien mal covient la majesté  
 Avec l'amour.  
 エドアールの注に <Ovide> とある。オウィディウスの『変身物語』に次のくだりがある。

non bene conveniunt nec in una sede morantur  
 maiestas et amor. (*Metamorphoses*, II, 846-847)  
 「威厳と恋というこのふたつのものは、両立することが  
 むづかしく、ひとつところにいつづけることはできない  
 ものだ。」(中村善也訳『変身物語』上巻, 岩波文庫, 92  
 頁)

72-73 行 D'aller en masque et de se déguiser,  
 Siffler de nuict par une jalousie  
 これはローマで詩人がよく見かけた娼婦の風俗である。『哀惜詩

集』にも同様の描写がある。

Aller de nuict en masque, en masque deviser,  
Se feindre a tout propos estre d'amour saisie,  
Siffler toute la nuict par une jalousie (sonnet 92, 5-7)  
「夜には仮面を着けてでかけ、仮面で語り、  
何かにつけて恋に落ちたそぶりを見せ、  
一晩中格子窓から口笛を吹く」

エドアールは〈jalousie〉について、〈une cage fenestriere à claire veue〉（内が透けて見える窓つき小部屋）と注釈している。Cotgraveの*A Dictionarie of the French and English Tongues* (London, 1611)はこの語に〈lattice window〉という訳を与えている。つまり格子窓であるが、これについてシャマールは脚注に、モンテーニュの報告する格子窓の記述を引用している。その一部を孫引きすると、〈Le plus commun exercice des Romains, c'est se promener par les rues... A dire vrai, le plus grand fruit qui s'en retire, c'est de voir les Dames aus fenestres, et notamment les courtisanes qui se montrent à leurs jalousies, ... Elles sçavent se presanter par ce qu'elles ont de plus agréable: elles vous presanteront sulement le haut du visage, ou le bas ou le costé, se couvrent ou se montrent, si qu'il ne s'en voit une sule lede à la fenetre. Chacun est là à faire des bonetades et inclinations profondes, et à recevoir quelque euillade en passant,〉(Montaigne, *Journ. de voy.*, Lautrey, p. 255-256)「ローマの人々にごく普通に見られる習慣は通りをぶらつくことである。... 実を言うと、その一番のご利益は、窓の女たちを見ることにある。特に格子窓に姿を見せる娼婦たちを。... 彼女たちは自分の一番よいところを見せる術を知っている。つまり人に見せるのは顔の上部だけ、下部だけ、あるいは側面だけで、隠すにしろ見せるにしろ、わずかな醜さも窓から見えないようにするのである。どの女もみな、そこに居て帽子を取って挨拶したり、ふかぶかとお辞儀をしたりして、通りすがりに男の投げる秋波を受けとめる。」

103 行 argent à intérêt

利子を生む金、つまり貸した金であろう。

122 行 Pour n'estre en ranc d'esgaldrine tenue

エドアールの注釈は、〈Squaldrine (esgaldrine) est une bordeliere ou buissonniere.〉とある。Huguetの*Dictionnaire de la Langue francaise du seizième siècle*によると、〈bordeliere〉は

「prostituée」(売春婦)である。「buissonniere」という名詞は出ていないが、「buissonnier」という形容詞には「vagabon」(放浪の)という意義が与えられている。シャマールは、*Dictionnaire de Tommaseo et Bellini* からイタリア語「sgualderina」の定義を引用している。「donna senza pudore non sempre venale」(恥知らずな女、必ずしも春をひさぐとは限らない)。ソーニエは彼の版の巻末にグロサリーをつけているが、それによると、「débauchée, vénal ou non」(売春するにせよしないにせよふしだらな女)ということになる。(以下に「グロサリー」と記すのはこのソーニエのグロサリーを指す。)ここはゆきずりの客を取る娼婦である。

123 行 De deux ou trois a poste je me mis

「poste」のこの用法はシャマールによればイタリア的でもありフランス的でもある。前記トマセオとベリーニの辞書からまた引用されている。「a posta d'alcuno, o simili, vale a suo piacimento o beneplacito」(「a posta d'alcuno」などの表現は、だれかの意のままに、という意味である。)、客を選ばぬ辻君をやめて、二、三人の「固定客」(後の169行に見える amis fermes)を取ったわけである。後を読むと実際は三人であったことがわかる。

125-126 行 ここでエドアールは「Deux font plus que un et trois que deux」(二人の方が一人より、三人の方が二人より多い計算になる)という注釈を加えている。

136 行 Donner à tous le martel en commun.

「martel」という語は後の168行および284行にも出てくる。「グロサリー」は、「de l'ital. martello, préoccupation mordante (de jalousie, ou autre.)」(イタリア語の martello から。嫉妬その他の激しい心痛)と解説している。

この語は『哀惜詩集』にも用例がある。

Et par martel de l'un, l'autre favoriser. (sonnet 92, 8)

「一人の嫉妬を煽っては別の男をちやほやする。」

141-142 行 C'estoit le bon, quand pour donner licence

A l'un des trois, les deux faisoient instance.

「グロサリー」によれば、「donner licence」はイタリア語「dar licenza」を基にした表現で「暇を出すこと」である。シャマールはこの箇所を次のように言い換えることができるとしている。

「C'était le bon, quand deux d'entre eux me pressaient instamment de renvoyer le troisieme」(彼らのうちの二人が

三人目に暇を出すようにしつこく私に迫ったのはちょうどいい機会だった。)

149-150行

Eux donc ayans de me demander honte

Une faveur qui ne mettoit a compte

〈mettre a compte〉もまたイタリア的表現で、「グロサリー」には〈profiter, rapporter (ital. mettere a conto)〉(利益を生む)とある。シャマールはまた前記トマセオとベリーニの辞書から引用している。〈mettere a conto〉は、〈mettere a interesse o usura〉(利子を生む)であると。つまりここで二人の男は何の見返りもなしに娼婦に要求をつきつけたことになる。

159行

Pour leur tirer les quatrins de la main

〈quattrin〉もイタリアニズムで、〈quattrino〉から。〈quattrino〉は、シャマールによれば、トスカナ・リーヴルの六十分の一にあたる銅銭で、フランスの〈quatre deniers〉(4ドゥニエ)に相当するところからそう呼ばれたという。エドアールはこれが一般にお金を表す意味で用いられると注釈を付している。

160行

Ores faignant de me faire nonnain

娼婦が男の気を引くために修道生活に入ると言い出す話はアレティーノ作『ラジオナメンティ』第一部第三日に見える。(結城豊太訳、角川文庫、198頁以下)

165-166行

Aucunefois je me faisois enceinte,

Ou me faignis de quelque fièvre atteinte

妊婦のふりや仮病も『ラジオナメンティ』の娼婦ナンナの語るところである。(前掲邦訳書、184頁、186頁)

172行

Les scoffions

エドアールの注に、〈Scoffions, coiffes d'or (金の冠り物)〉とある。「グロサリー」は、〈grande coiffe (ital. scoffione)〉(大きな冠り物、イタリア語の scoffione から)としている。

173行

pianelles

エドアールは〈pantoufles〉(スリッパ)と。シャマールはフランス語の〈mule〉(婦人用の踵のついたスリッパ)をこれの訳語に当てている。

174行

Garnels, bourats, chamarres, capareilles

1. 〈garnels〉はイタリア語の〈gonnella〉から。エドアールはこれについて、〈gonnells, habillemens romanesques〉(ローマ風衣服)という注釈を与えている。シャマールはトマセオとベリーニの辞書に拠って〈tunique〉(ローマの寛衣)という解釈を挙げ

た後, Antoine Ouden (*Rech. ital. et franc.*) から, <Gonnella, juppe de femme> (婦人のスカート) という定義を引用している。一方「グロサリー」には, <garnel ou gonnell: jupe (cf. ital. gonnella)> (スカート, イタリア語 gonnella から) とある。

2. <bourats> もイタリア語からの借用語で, シャマールの引用する「トマセオとベリーニ」によれば, <buratto> とは <sorta di drappo e trasparente> (一種の透き通った薄い布) である。

3. <chamarres> についてのシャマールの解釈は <le mot est de la vieille langue, pour désigner un vêtement orné de passementerie (この語は古語で, 飾り紐の装飾を施した衣服を指す)> というものである。一方「グロサリー」は, スペイン語の <zamarra> からとして, <vetement long> (長衣), またイタリア語 <camorra> からとして <robe> (ドレス, ガウン, 寛衣) という意義を与えている。しかしすぐ前の行に出ている <robbe> とは区別して訳す必要があり, 適当な訳語もないところから, そのままカタカナで表記しておいた。

4. <caparellles> については, シャマールは辞書類に見当らなかったとして, Marty-Laveaux から引用している。<CAPARELLE (Caparello, bout du tetin, selon Oudin, et probablement par suite mouchoir, fichu servant à couvrir le sein.)> すなわち「乳首」から転じて「胸もとを隠すためのハンカチ, ネッカチーフ」を指すということになる。「グロサリー」はイタリア語の <caparello> からとして, <cache-sein> (胸もとを隠すもの) という意義を与えている。拙訳では語調を考えて似た役目をするもののうちから短い語を選んだ。

175 行

Licts de parade, et corames dorez

<Corames, cuirs dorés (金色に染めた皮)> というのがエドアールの注釈である。シャマールは「トマセオとベリーニ」から <Corame: 1. aggregato di cuojo; 2. paramento da stanze fatto di cuojo> (1. 皮の総称, 2. 皮製の室内装飾品) という説明を引いている。「グロサリー」は <parure de cuir> (皮製の装飾品) としている。

178 行

coches de vecture

まずエドアールは <Coches, petis chariots> と注記している。ユゲの前掲辞書によると <chariot> は <char> (二輪馬車) あるいは <carrosse> (豪華な四輪馬車) である。また <coche> 自体は同辞書によると <char> となっている。もう一つの語 <verture> は <transport> (輸送) である。<coche> には別の意味もあるので,

- 「coche de transport」で「馬車」ということになる。「グロサリー」には「coche de transport」とある。
- 182-184行 Car tout cela qui s'achapte aux boutiques  
Ne coustoit rien, et mesme le boucher  
Le plus souvent estoit payé en chair  
エドアールの注に「avarice et payement de putain (娼婦の吝嗇と支払い方)」とある。「Le boucher (肉屋)」と「chair (食肉, 肉体)」を並べたのはブラック・ユーモアである。
- 193-194行 A cest effect je tenoy pour fantesque  
Une rusee et vieille Romanesque  
エドアールは「fantesque, chamberiere」と注記している。「グロサリー」には、「soubrette [ital. fantesca] (小間使い, イタリア語「fantesca」から)」とある。喜劇で大いに活躍する役どころである。「chamberiere」も同義。「romanesque」は十六世紀ではまだ「ローマの」という意味しか持っていない。
- 200-202行 Disant comment j'estoy de sang Romain,  
Et que j'estoy femme d'un gentilhomme,  
Lequel pour lors estoit banny de Rome.  
『ラジオナメンティ』第一部第三日の始めで、ナンナの母親はローマでのナンナのデビューにあたり、外国の貴族の出であるとか、父親を内乱で失ったなどという作り話を巧みに人々に信じこませる。(前掲邦訳書, 156頁)
- 205行 Des escroqueurs  
これについてソーニエが興味深い注を付している。それによると、動詞「escroquer」は、もとは、特に娼婦が被害者となる類の盗みを意味していたという。すなわちソーニエはBeroalde de Vervilleの*Palais des Curieux*からの引用に拠って、娼婦に代金を払うどころか彼女の財布や衣類、指輪などを盗む者に使われた語であったことを示している。(D. J. R., ed. Saulnier, p. 156, note.)
- 207-208行 Ce qui causoit que moins je m'adressois  
A l'Espagnol qu'au liberal François  
シャマールはアレティーノの娼婦ナンナも娘のピッパに同様の忠告をしていると指摘している。それは『ラジオナメンティ』の第二部であるが、邦訳は見当らない。(Ragionamenti, part. II, giorn. I, reimpr. Frank, Rome, 1911, p. 197-198)
- 213-214行 Nous pensant bien payer d'une gambade,  
D'une chanson, d'un luth, ou d'une aubade:

〈payer en gambade〉という成句は「支払いをごまかす」という意味で現代にも残っている。ここでは〈gambade〉は次の行の歌やリュートやオーバード（朝の音楽）と並列に扱われている。ここでの意味を知るために、同じくこの詩集の作品 32 “Contre une vieille”（老婆を難ず）の用例を見てみよう。ここでも〈gambade〉は〈aubade〉と結びつけられている。

Lors tu mets en jeu quelque moyne,  
Ou quelque monsieur le chanoyne,  
Qui a force ducats en bourse,  
Ou il y a plus de ressource  
Qu'en ces prodigues de gambade,  
Que ne donnent que des aubades. (43-48)

「そこでお前はどこかの坊さんや、  
参事会員殿を引っ張り出す。

ドゥカート金貨で一杯の財布は

gambades の大盤振舞より

よっぽどましな財産だから、と。

あちらがくれるのはオーバードばかり、と。」

ここで「お前」とは、若い娘にむかって、若い男を相手にしないよう忠告する老婆のことであり、気前よく〈gambade〉を振る舞うのは娘を恋する若者である。〈gambade〉そのものは「はねまわること」であるが、それが「オーバードをくれる」とあるから、比喩的に受け取るべきである。すなわち、芸を見せてお金や高価な贈り物に代えるのであろう。当詩行に戻ってみると、後から出る歌やオーバードなどをひっくるめて先に成句の意味あい表現したものと思われる。

219 行以下

この後続く娼婦の心得としてのさまざまな生活上の規制がすべてアレティーノに依拠していることは 228 行にはっきりと述べられているが、具体的には『ラジオナメンティ』第二部である。

228 行

Pietro Aretino. 1492 年トスカナ地方に生まれる。後半生をヴェネツィアで暮らし、1556 年そこで死んだ。辛辣なペンで権力者に恐れられた。ブルクハルトによれば、「ある意味ではジャーナリズムの元祖の一人」である（柴田治三郎訳「イタリア・ルネサンスの文化」、中央公論社、『世界の名著』45, 226 頁）

230 行

「彼の本」とは明らかに、ボッカチオの『デカメロン』と並んでイタリア・ルネサンスを一方で代表する『ラジオナメンティ』であり、赤裸々な性風俗の描写と辛辣な時代風刺で知られる。その恐れを知らぬあけすけさ、勝ち誇るような調子は、デュ・ベレーの

この詩とは異質な精神を感じさせる。

231-232 行

Et d'abondant mille tours incogneus

Pour esveiller la dormante Venus

エドアールの注は、〈Resvieller Venus dormante est es-mouvoir à luxure〉（眠れるウェヌスを目覚めさせるとは情欲をかきたてること）とあり、さらにギリシアの格言への言及であるといふ加えている。シャマールはこの格言を知らないといふ注にのべているが、ソーニエの方は次の格言をあげている。〈sine Cerere et Libero friget Venus〉「Ceres（穀物の女神）と Liber（酒の神）となくしては Venus（恋愛の女神）も凍る；食物と酒なくては恋も語れず；貧乏と恋愛とは両立せず。」（前掲引用語辞典）

ここでは別に料理や酒を用意したわけではなく、催淫作用があると信じられた民間伝承的な何かの方法を暗示していると思われるので、この格言の趣旨には関係がないが、ウェヌスの冷却という点でつながっている。後の 292 行には「血を温める」という表現がある。

233 行

J'estoy pourtant en mes propos honneste

〈honneste〉について、ソーニエはイタリア的語法であるとして、洗練された遊女 (courtisane raffinée) が辻君 (la fille de rue) に対して 〈cortesiana onesta〉と呼ばれたと注記している。

242 行

Sage au parler, et follastre à la couche

エドアールの注に一言 〈Horace〉とあるのを受けて、シャマールもソーニエもホラティウスの次の詩句を挙げている。

ludentem lasciva [decent], severum seria dictu. (Art poetique, 107)

「冗談ならばふざけた顔、莊重な言葉は真面目顔に、それぞれ適しているわけです。」（鈴木一郎訳「詩論」，世界文学大系 67，『ローマ文学集』，筑摩書房，205 頁）

260 行

Qu'un barisel, ny d'un sbirre outrageux

エドアールの注は 〈Barisel, prevost. Sbirre, sergent.〉 (barisel は長官, sergent は巡査) というものである。「ユゲ」によると、〈barisel〉は 〈chef de sbires〉すなわち 〈sbires (sbirres)〉の長であり、〈sbirre〉はイタリア語 〈sbirro〉（巡査）から導入した語である。シャマールはこの二つの語を並べて並べて用いた例がラブレールの『第三の書』第二十章にあることを指摘している。

「——これは大きに恭けない、（とパニユルジュは山羊野鼻助のほうを振り向いて言った、）君は可愛い<sup>ふるまい</sup>筵司だ。俺の看守長だ。獄守だ。お巡りさんだ。お巡り隊長さんだ。」（渡辺一夫訳『第三之



書』・『パンタグリユエル物語』, 岩波文庫, 128 頁)

262 頁

En court Savelle ou bien en tour de Nonne

〈court Savelle〉についてのエドアールの注は 〈Jurisdiction du prevost de l'hostel du Pape〉である。教皇庁のプレヴォ裁判所とでも訳すのであろうか。プレヴォは国王や領主などの代理裁判官である。シャマルの注およびソーニエの注によれば, 〈Corte Savella〉は, 主として風俗上の犯罪を扱ったところで, 代々サヴェッラ家の当主が司宰したためにこの名で呼ばれた。『ラジオナメンティ』第一部第三日では, 娼婦ノナが男への弁解として, のっぴきならない裁判のために裁判所へ行っていたという作り話をしている。(前掲邦訳書, 191 頁)

〈tour de Nonne〉つまり 〈Torre di Nona〉も監獄の名。『ラジオナメンティ』第一部第三日には, 金の鎖を娼婦に騙し取られた男が, てっきり泥棒と信じた別の男をトルレ・ディ・ノーナへ引っ張って行き, あやうく縛り首にしまいそうになるという話がある。(前掲邦訳書, 211 頁)

270-272 頁

Ayant passé le meilleur de mon aage

En ces plaisirs, (si plaisir faut nommer

Un peu de doux meslé de tant d'amer).

ソーニエは, 「我々の遊女はペトラルカ振りで語っている。」と注記している。苦い甘さといった類の撞着語法はペトラルカ風恋愛詩人が好んで用いる言い回しである。

285-286 頁

Outre la peur (geine perpetuelle)

D'une verolle ou d'une pellarelle

エドアールは, 〈Pellarelle, lepre de cuir, faisant decheoir le poil〉(皮膚のレプラで脱毛を生じる)と注釈している。シャマルの注によると, イタリア語 〈pelarella〉の訳語でフランス語の 〈pelade〉にあたる。動詞 〈peler〉は『哀惜詩集』に用例がある。

... et plus phureux encor'

Qui a peu sans peler vivre trois ans à Rome!

(sonnet 94,13-14)

「... まして幸いなるかな,

毛の抜けることもなくローマで三年も過ごした人は。」

また次のソネでも。

Il n'eust point espruvé le mal qui fait peler

Il n'est fait de son nom la verole appeller

(sonnet 95, 12-13)

「(フランス人が) 毛の抜ける病に苦しむようなこともなく,

梅毒をわが名で呼ばせることもなかったろうに。」

デュ・ベレーと同じ時期にローマに暮らし、『哀惜詩集』とテーマや体裁を同じくする詩集 *Les Souspirs* をほぼ同じ時期に刊行した詩人オリヴィエ・ド・マニーもこの集のソネ 115 で脱毛症について歌っている。このソネもまた老いた遊女を歌ったものである。

Ses sourcils sont tombez, son poil est tout destoint,  
Et bref, quoy qu'elle dye, elle a la pelarelle.

(*Les Souspirs*, éd. David Wilkin, CXV, 7-8)

Bref, elle a la pelade et la verolle ensemble.

(idem, 14)

「眉は抜け落ち、髪はすっかり無くなっている、  
何と言おうと、つまり彼女は脱毛症なのだ。」(7-8 行)  
「つまり彼女は梅毒と脱毛症を病んでいる。」(14 行)

290 行

de se faire la blonde

イタリア語の <farsi la bionda> を写した表現。シャマルはまた「トマセオとベリーニ」から引用している。<Bionda, lavanda colla quale le femmine si bagnano i capelli per farli biondi.>

すなわち女性が金髪にする目的で髪を洗う洗浄液(灰汁)である。ソーニエの注によると、ペトラルカ趣味の金髪の人気は完全にブルネットを押さえて優位に立ったのは十六世紀半ばのことである。そこでイタリア女達は髪を <décolorer> (脱色) することに血道を上げるようになった、と。

291 行

De se friser, de corriger l'odeur

髪を縮らせるファッションは、すでにたびたび引用した『哀惜詩集』のソネ 92 の冒頭で言及されている。

En mille crespillons les cheveux frizer

「髪を縮らせて幾重にも波打たせ」

さらに当詩集の作品 34, “La Courtisane repentie” (「悔悛の遊女」) にも。

Adieu le soing de friser les cheveux (76)

「おさらばだ、髪を縮らせる気苦労よ」

後の「臭いを消す(直訳すれば矯正する)」も同じ詩の中にある。

Adieu, par qui se corrige l'odeur (Idem, 92)

「おさらばだ、臭いを消す種々の手だてよ」

292 行

Serrer la peau, réchauffer la froideur

前半の <serrer la peau> については解釈が分かれている。シャ

マールは、「悔悛の遊女」における用例(下に引用)と比較しつつ、ここではコンテキストからして、皮膚をひきしめる効果をねらったマッサージのようなものだとしている。一方ソーニエはシャマールの注とは逆に、マッサージのようなものではなく、下記用例が示すようにここもコルセットの類であると注記している。問題の詩から、コンテキストを知るために少々長く引用しておく。

Et ne veulx plus, pour me faire plus belle,  
Changer par art ma forme naturelle.  
Plus de pincette et miroir je ne veulx:  
Adieu le soing de friser les cheveux,  
Eaux et unguents par lesquels on efface  
Taches, rougeurs et roissements de la face,  
Ce qui deride, et plus etroittement  
Serre la peau dessous le vestement.

(“La Courtisane repentie”, 73-80)

「もうしたくない、より綺麗になろうとして  
自然の容姿に人の手を加えることなどは。  
毛抜きも鏡ももう欲しくない。  
おさらばだ、髪を縮らす気苦労よ、  
しみや赤斑、そばかすを消す  
ローションも軟膏もおさらばだ。  
皺をのばすもの、またぴったりと  
着物の下で肌をしめつけるものも。

この詩でも当時の遊女が行っていた美容術が問題になっており、その意味では同じ文脈上にある。(ただここでは「誰もがする苦労」であり、「ローマ女なら今でも当たり前苦労」であると思ふが、)問題は「衣服の下で」という語句の存在であるが、ソーニエの解釈ではこの語句があってもなくても同じ意味になる。シャマールに従って訳せば「肌を引き締め」となり、ソーニエに従えば「肌を締め付け」ということになる。ここは一応ソーニエに従った。後半の <réchauffer la froideur> もまた同じ詩に用例がある。

Adieu par qui s'échaufe la froideur (Idem, 91)

「おさらばだ、血をあたためるものよ」

直訳すれば「冷たさをあたためる」となる。これについてはシャマールもソーニエも一致して <aphrodisiaque> であるとしている。催淫剤、または同じ効果を持つ呪術的手段か。いずれにせよ自分の「冷たさをあたためる」わけであるが、これに対して他人

の「冷たさをあたためる」のが、231-232 行の「眠れるウェヌスを目覚めさせる」秘術であるとソーニエの注は指摘している。

295 行 O bien heureuse et trois et quatre fois  
ウェルギルウスの次の詩句に拠る。

O terque quaterque beati (Aeneis, I, 94)

陥落したトロイアを脱出したアエネーアースの一行がユーノーの送ったアエオルス（風の神）に悩まされた時、アエネーアースが嘆いて言った言葉。「トロイア城の高壁の、下で父祖の眼前に、戦死をするを得しものは、三重四重の幸福ぞ。」（泉井久之助訳『アエネーイス』上巻、岩波文庫、19 頁）

302 行 Faire de moy une metamorphose  
エドアールは〈metamorphose〉に〈transformation〉（姿を変えること）という注を加えている。

305 行 Ce que je feis: et devins convertie  
〈Converties sont religieuses non professés〉とエドアールの注にある。〈religieuse professée〉の誓願修道女に対して、〈convertie〉は誓願を立てない修道女である。

309-310 行 Je me trouvay à mal party rangee  
Et plus d'habit que de vouloir changee.  
作品 35, “La Contre-repentie”（「反悔悛者」）の最後は次のようになっている。

Et quant à vous, armes de chasteté,  
Habits tesmoins de nostre honnesteté,  
Le vermoulu, et les taignes encore,  
Et le reclus desormais vous devore:  
Je vous delaisse, et promez ne sentir  
D'or'enavant un autre repentir.

(“La Contre-repentie”, 141-146)

「そしてお前たち、純潔の武器にして  
我らが貞淑の証人である法衣たちよ、  
虫食いの衣よ、また衣蛾たちよ、  
今後は隠修士がお前たちを食らうだろう。  
おさらばしよう、この先二度と  
悔いを重ねぬと約束して。」

314 行 Me repenty de m'estre repentie.

これと同じ表現が「反悔悛者」にある。

Et me repens de m'estre repentie. (Idem, 24)

「また悔やんだことを悔やんでいる。」

- 321 行    Ou je r'aquis d'un utile dommage  
 <utile dommage (有益な損失)> とは撞着語法である。ここでエドアールは <Utile pour elle, dommage pour l'amant (彼女には有益愛人には損失)> という注釈を加えている。シャマールは単にこれを採録するにとどめているが、ソーニエは「疑わしい解釈」とつけ加えている。ただしこれに代わる解釈は示していない。エドアールの解釈がここは自然であると思われる。
- 328 行    Du trente et un le fameux deshonneur  
 エドアールの注に <Chevauchee forcee jusques à 31 de maraux.>  
 とある。三十一人にもものぼるならず者による騎乗(直訳)である。これについてシャマールはウーダン (Oudin, *Curiosite francaise*) を引いて注釈している。<Dar un trentuno, c'est passer sur le ventre à une garce, premierement tous les maistres, et puis les valets, jusque aux marmitons.> すなわち「主人一族に始まって下僕から皿洗い人にいたる多くの男が一人の女の腹に乗ること」である。また、同時に多くの男を相手にする女を指す <trentuniera> という派生語もあったという。
- 329-330 行    Et supposé au lieu d'un gentilhomme  
 Dedans mon lit l'executeur de Rome  
 <supposé> は <substitué> (身代わりの、すり替えられた) を意味している。「首切り役人」については、『ラジオナメンティ』が念頭にあって出てきた言葉ではないかと思われる。(ソーニエは、実際の出来事を書いていると注記している。) アレティーノの娼婦ナンナは賛美の目でなく悪意の目で見ると男に復讐するためなら、首切り役人にだって身を任せたかもしれないと語っている。(前掲邦訳書, 205-206 頁) どちらの作品のコンテクストにおいても、首切り役人は最低のランクを象徴するものとして持ち出されているのである。
- 334 行    La denterelle et pellade honteuse  
 <denterelle> についてシャマールが引用しているウーダンによると <Dentaruola, mal de dents des enfans.>, すなわち子供の歯の病気ということになる。しかし、シャマールも指摘するように、ここではすぐ横にならべられた「脱毛症」と似たりよったりの歯の抜ける病気と考えられる。
- 338 行    Et pour cela ne fermay la boutique  
 ここで詩人は、ヴィヨンの兜屋小町が後輩の売春婦に与える「バラード」を思い浮かべていたかもしれない。「... 若い娘だとて／

いずれそのうち 店仕舞せずばなるまい。／年老いて花の色香もあせる時、／老<sup>ほ</sup>耄れた坊さんほどに 役立たぬこと／質を落とした贗造のお錢も同然。」(鈴木信太郎訳『ヴィヨン全詩集』, 岩波文庫, 90-91 頁)

344 行

Que mon automne on prenoit pour aesté

エドアールはこれに, 「アケラオス」の言葉から採ったものと注記しており, プルータルコスの伝えるこのマケドニア王のエピソードをシャマルもソーニエも注に紹介している。宴会の途中でエウリピデスがアガトンに接吻したのを見て驚く人々に, アルケラオスは言った, 「何も驚くことはない。美女というものはその秋でさえ美しいのだから」と。(Plutarchus, Regum et Imperatorum Apophthegmata, Archelaos, III)

351-352 行

Et ne se fust nul autre peu vanter

De scavoir mieux le Petrarque chanter.

これも作品 34 「悔悛の遊女」に対応箇所を持つ。

(Adieu. . .)

Le luth, le bal, et tout ce qui plaist mieux

Soit du Petrarque, ou soit du Furieux.

(“La Courtisane repentie”, 95-96)

「(おさらばだ ... )

リュートもダンスも, またペトラルカのお気に入りも,

狂えるオルランドーのお気に入りも。」

ブルクハルトは『イタリア・ルネサンスの文化』の中で, 娼婦の教養についての注として, アレティーノの証言を取り上げている。「アレティーノは, Ragionamento del Zoppino, p. 327 で一人の娼婦について, この女がペトラルカとボッカチオを全部と, ヴェルギリウス, ホラティウス, オヴィディウス, その他多数の作者の, ... ラテン語の詩の句をそらんじている, と言っている。」(前掲邦訳書, 433 頁)

354 行

Fust sur la toile, ou fust sur l'estamine:

「l'estamine」は液体や穀物を漉すための目の粗い布。ここでエドアールは「Honneste exercice feminine」と注記している。堅気の女の仕事という意味であろう。

357-359 行

Aucunefois en accoustrement d'homme,

Je passageoy pompeusement par Rome

Sur un cheval de mesme enharnaché

『哀惜詩集』にも同様の描写がある。

Celuy qui par la ruë a veu publiquement

La courtisane en coche, ou qui pompeusement  
L'a peu voir à cheval en accoustrement d'homme  
Superbe se monstret: . . .

(sonnet 131, 9-12)

「ただこの町の往来を娼婦が人目もはばからず  
馬車で行くのを目にした者、また絢爛とはなやいで、  
男の服装に身を包み、馬上姿も堂々と  
現われるのを目にした者、...」

また作品 34 にも馬車で往来が娼婦の風俗として言及されている。

Je ne veux plus me pourmener en coche,  
Marque jadis des Dames sans reproche,  
Signe aujourd'huy des vices éfrontex.

(“La Courtisanne repentie”, 37-39)

「馬車で出歩こうとは思わぬ、  
かつてはりっぱな婦人の乗り物、  
今では恥ずべき墮落のしるしだ。」

360 行 Et le pennache à la guelphe attaché

「ゲェルフ流に」とは帽子の右側にという意味である。シャマールはマルティーラヴォー (Marty-Laveaux, *Langue de la Pléiade*, t. II p. 403) を引いて注解している。イタリア人は帽子に羽根をつけるのを好んだが、ゲェルフ党は右側、ギベリン党は左側につけた、と。

361-362 行 Ne me monstros moins superbe et vaillante  
Qu'une Marphise ou une Bradamante.

マルフィーズもブラダマントも『狂恋のオルランドー』の登場人物である。この作品 (Ludovico Ariosto, *Orlando furioso*, 1516-1532) は、シャルルマーニュに仕える勇士たちの冒険と当時のフェラーラの支配者エステ家の栄光を結びつけたもので、三つの筋に分かれているが、その一つがサラセン人ルッジェロのブラダマントへの恋と改宗の物語になっている。これがエステ家の祖というわけである。ブラダマント、マルフィーズは勇ましい女戦士である。

365 行 Fust aux eschets, ou fust à la premiere

ユゲの辞書によると、〈la premiere〉はトランプのゲーム、〈le prime〉にあたる。『哀惜詩集』にもこのゲームへの言及がある。

Et joué toute la nuit aux dez, à la premiere,

(sonnet 151, 3)

「また一晚中殻を振り、プリム遊びをした後で、」  
このソネでも美食や「ウェヌスの」遊びと並べられていて、背景に遊女が存在があることを暗示している。

372 行 Autant de fois la manche on me donnoit.

〈manche〉は普通は「袖」の意味であるが、エドアールの注は〈escorniflerie de jeu〉というものである。〈escorniflerie〉は「他人に寄食すること」である。「グロサリー」は、〈Manche: pour-boire (チップ)〉とした上で、もともと道を渡るのを助けるために袖を持ち上げたり手を取ったりしてくれた人に与えたものと説明している。イタリア語の〈mancia〉は「チップ」を意味する。

376 行 Et leur baillois à la rafle à jouer.

〈rafle〉についてはエドアールの注に〈jeu expeditif (すぐに片のつくゲーム)〉とある。シャマルによると、二つの骰が同じ目を出すと賭金全部を得るという遊びである。

378-380 行 Je recueillois la laine de mes bestes:

Donc je tondois les unes quelquefois,

Et quelquefois les autres escorchois.

ここでデュ・ベレーは、スエトニウスの伝えるティベリウス帝の言葉をもじっている。ほとんど格言化しているその言葉は、〈boni pastoris esse tondere pecus, non deglubere〉(Suetonius, *De vita caesarum*, Tiberius, 32) である。「立派な羊飼いは羊の毛を刈っても、皮は剥がないものだ。」(国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』上巻, 岩波文庫, 262 頁)

397-398 行 Je me trouvois de ducats plusieurs milles,

qui ne m'estoient en un coffre inutiles

直訳すれば「私はドゥカート金貨から数マイル離れたところにいた」となる。高利貸しを副業にしていたか銀行に預けたかであろう。エドアールの注は一言、〈Usure〉(利子)である。ドゥカート金貨は十三世紀にヴェネツィアで鑄造された金貨。

401-402 行 La pluy d'or de la fille d'Acrise

アルゴスの王アクリシオスは、娘の子に殺されるという神託があったため、娘ダナエーを青銅の部屋に閉じ込めたが、ゼウスは黄金の雨に身を変じて彼女と交わった。生まれた子はペルセウスで、ゴルゴーン退治から戻って来た後、王とその一党にゴルゴーンの首を見せ、石に変えた。ソーニエは、ゼウスが黄金の雨になって来たのではなく、金貨を手にして来たのだという通説があったことを指摘している。「黄金はあらゆるものを、冥府の門をさへも開く」(前掲引用語辞典)という格言化した言葉もソーニエ



は挙げている。

405-410 行 これまで「誰にも惚れず」愛を金儲けの具にしたことへの愛の神の復讐である。

418 行 マイナデスあるいはバッケーは酒神バッコスの子の女たちで、狂気に駆られて山野を走りまわった。

429-430 行 De retenir par lyens et par charmes  
Cest obstiné vainqueur de telles armes!  
エドアールの注に〈Allusion à la Pharmaceutrie de Vergil〉(ヴェルギリウスの魔女への言及)とある。〈pharmaceutrie〉はユゲによると〈magicienne〉(魔女)である。ウェルギリウスの『牧歌』には恋人の心を引き寄せるための呪術が歌われている。(Bucolica, VIII, 64 et suiv.) 440 行の注参照。

433-436 行 . . . : ores d'un cimetière,  
Tirant de nuit quelque ombre solitaire,  
Ores au ciel la Lune ensanglantant,  
Ores le cours des fleuves arrestant.  
月を「血で染める」のではないが、月を天から降ろす魔術についてはウェルギリウスの『牧歌』に次の詩句がある。

Carmina vel caelo possunt deducere lunam

(Vergilius, Bucolica, VIII, 69)

(呪文は天から月を降ろすことさえできるもの——試訳)  
月を降ろすほか、川の流れを止め、死者の霊を呼び出す魔術については『アエネーイス』第四巻にも言及されている。邦訳から引用すると、

「さてこの巫女のいうことに、自分は自在に人選び／呪文をつかってその人の、心を自由へ解き放ち、／また反対に他の人の、心にきびしく堪えがたい、／恋の苦勞を植えつける、ばかりか川の流れ止め、／空をわたる星どもを、逆に走らせ真夜中に、／死霊の励起もするといひ、…」(前掲邦訳書上巻, 249 頁)

またホラティウスも月を降ろし死霊を呼び出す術について魔女自身に語らせている。

an quae movere cereas imagines,  
ut ipse nosti curiosus, et polo  
deripere lunam vocibus possim meis,  
possim crematos excitare mortuos

(Horatius, Epodon XVII, 76-79)

(知りたがる者よ、現にお前も知る通り、蠟の人形をも動かし、呪文によって月を天から降ろし、死者の灰をも立

ち上がらせるこの私が... ——試訳)

438 行 Les poincts couplez

シャマールはこれが何を意味しているか判明しなかったと注記している。ソーニエは、注に、恐らく土占い（ひと握りの土を投げてその形から占うもの）の一種であろうと記し、「グロサリー」でも取り上げている。それによると、〈point〉は数的意味を持つとしながら、すぐ続けて、針で刺すことを意味するかもしれないと述べ、その場合は呪いの行為になる、と。彼は〈couplé〉には触れていないが、「一對にした」という意味を持つこの語の存在は恋人の心を引き寄せようとするこの呪術の場合意味深いものがあるように思われる。いずれにせよこれは適当な訳語がないので原語をカタカナで表した。

440 行 les lauriers bruslez

すでに見た『牧歌』において、ウェルギリウスの魔女はつれない恋人ダプニスの心に愛の火をかきたてるため、月桂樹を焚く。

Sparge molam et fragillis incende bitumine laurus.  
Daphnis me malus urit: ego hanc in Daphnide  
laurum.

(*Bucolica*, VIII, 82-83)

（粉を撒き、れき青の火の中で月桂樹を燃えさせよ。ダプニスは無情にも私を恋の火で焼いた。だから私はダプニスを燃えさせんと月桂樹を焚く。——試訳）

ダプニスのシンボルである月桂樹（ダプネー）をデュ・ベレーの遊女も燃やしている。ダプニスは全てのつれない恋人の象徴としての意味を獲得していることになる。

441 行 Ce que du front des poulains on attire

エドアールの注は〈Hippomane, venin amatoire〉（ヒッポマネス、媚薬）となっている。デュ・ベレーは1552年の『創作詩集』（*Œuvres de l'Invention de l'Auteur*）に収められた「絶望者の嘆き」（“La Complainte du Desespéré”）の中でも同様の呪術に触れている。

Ny les menstrueux breuvage  
Meslé avecques la rage  
Qui s'enfle au front des chevaux  
(*Œuvres Poétiques*, éd. Chamard, t. IV, “La Complainte du Desespéré”, 187-189)  
「月ごとに見るかの液と、  
馬の額にふくれ出る

## 神秘を混ぜた薬さえ」

上の詩の注にシャマールは「若駒の額の皮にできるいぼで、媚薬として用いる。」と記している。

ソーニエはこの行の注に、「若駒の額に生じる突起から抽出した黒い液体、ヒッポマネス」と記している。『アエネーイス』第四巻ではカルタゴ女王ディードーがこの薬を用いている。「... 生まれ出る、馬の額にある媚薬、／巫女はこれを母馬の、先手を打って剥いで取る。」(前掲邦訳書上巻, 251 頁)

442 行

Les yeux de loup, les images de cire

「狼の目」について、シャマールはコルネーユ・アグリッパ (Cornelle Agrippa, *De occulta philosophica*, I, L) を引いて、狼やハイエナの目が恐怖を吹き込む目的で用いられたと注記している。「蠟の人像」については、ソーニエが「(針で突くなどして) 人を呪うのに用いられた小像」と注記している。前に引いたホラティウスの詩句にも「蠟の人形」が見えるが、同じ作者の『風刺詩集』にも人像を使って降霊術を行う魔女の話が出ている。無縁墓地の番をする案山子の目撃談である。「私自らカニディアが、姉のサガナとつれだって黒いマントをからげた上、髪ふりみだしてはだしのまま、大声あげてくる場面を、一度目撃したことがある。(...) この二人は爪で地面を引っ搔いて、黒い小羊を歯でさいて、ずたずたにしてしまったのだ。その血は溝に流れてゆき、死者の霊をも呼びおこし、占いの答えが出そうだった。女等は毛製と蠟製の二つの像をもっていた。」(鈴木一郎訳「魔女とかかし」, 世界文学大系 67『ローマ文学集』, 162 頁)

ウェルギリウスの『牧歌』では、魔女は蠟で作ったダプニスの像を持って祭壇の周囲を回り(次注)、その後次のように歌う。

Limus ut hic durescit, et haec ut cera liquescit  
uno eodemque igni, sic nostro Daphnis amore.

(*Bucolica*, VIII, 80-81)

(この粘土が固くなるように、この蠟が同じ一つの火で溶けるように、我らの愛がダプニスに働かんことを——試訳)

443 行

Les noeuds charmez, et les nombre de trois

魔力を封じこめた結び目と霊力を持つとされる三の数は『牧歌』で次のように歌われている。まず三の数について。

Terna tibi haec primum triplici diuerna colore  
licia circumdo, terque haec altaria circum  
effigiem duco: numero deus impare gaudet.

(Bucolica, VIII, 73-75)

(私はまずそれぞれ異なる色に染めた三本の糸でお前を三巻きする。それからお前の像に祭壇の周りを三度まわらせる。奇数は神のめでたもうものゆえ。——試訳)

次に結び目について。これは愛の結合を意味している。

Necte tribus nodis ternos, Amarylli, colores;  
necte, Amarylli, modo et <Veneris> dic <uincla  
necto> . (Idem, 76-77)

(三色の糸それぞれを三度結べ、アマリリスよ。結べずぐにアマリリスよ。そして唱えよ、「われウェヌスの絆を結ぶ」と。——試訳)

霊数としての三およびその倍数は『変身物語』にも出ている。

「(女神キルケは) 有毒な根からしぼった汁液を、ここへふりそそぎ、聞いたこともないような不可解な言葉をつらねた呪文を、九度ずつ三回も、魔力をもったその口で唱えたのだ。」(前掲邦訳書、下巻、252 頁)

444 行 Avec le mal qu'on apelle des mois

エドアールの注に <Fleurs menstrues> (経血) とある。

445-446 行 娼婦がしばしば呪術に頼ったことはブルクハルトも指摘している。「ローマの娼婦たちは、自分の身にそなわった魅力を、ホラティウスのカニディアの流儀で、もっと別な魅力をもって引き立たせようとした。」(前掲邦訳書、556 頁) ブルクハルトはこの後アレティーノに基づいてさまざまな呪物を挙げ、こうつけ加えている。「そのほかに、月明かりの時や、地面に描いた図や、蠟か青銅で作ったひとがたについて唱える呪文もある。」(同書、同頁)

450 行 argent à compagnie

ソーニエの注によるとこれも前出の <argent à intérêt> と同じである。

411-456 行 財産目当ての若者に遊女が夢中になるという話はすぐにヴィヨンの兜屋小町を思い出させる。「... 性悪の若造一人に入揚げて／惜気なく わが身をまかせるためだったとは、／ ... ／この人ばかりを心から 妾は可愛く思うていた。／それなのに 男は妾を苛い目に会わせるばかり、／妾の貯めた財産を目当てに 妾を愛したのだ。」(前掲邦訳書、84-85 頁)

467-470 行 続いてここもヴィヨンの遊女を思い出させる。「今は額に皺深く、白髪も黄色く汚れ、／眉毛も脱け落ち、笑みを湛えた流目で／幾人となぐ 豪商の 心を／射抜いた眼に光り消え、...」(前掲邦訳書、88 頁)

477-478 行

Le sens me fault, et l'esprit qui me laisse  
Plus que le corps se sent de la vieillesse.

エドアールはウェルギリウスの次の詩句を典拠としてあげている。

Omnia fert aetas, animum quoque

(*Bucolica*, IX, 51)

「歳月はすべてのものを運び去る、心をもまた。」

(前掲引用語辞典)

488 行

Composer fards, contrefaire des eaux

まず <composer> は、ユゲの辞書によると、<disposer> (並べる、用意する) の意である。<contrefaire des eaux> についてはソーニエが <préparer des lotions de beauté> (化粧水を用意する) という解釈を注に示している。現役の遊女のために化粧を手伝うのであろう。

490 行

crier les chambelles

エドアールは <Chambelles, petits pains plat comme eschaudez> と注記している。<eschaudez> の類の小さな平たいパンということで、<échaudé> は消化のよい軽い菓子である。イタリア語 <ciambella> から。「グロサリー」は <petit galette> (菓子パン) と。

501-502 行

O que je suis differente de celle

Que j'estois lors, . . .

ヴィヨンの遊女、兜屋小町も同じように嘆いている。「ああ、幸福な昔には、どんな女で妾はあったか、／どんな女にそれがなかったか、...」(前掲邦訳書、86 頁)

エドアールの注はウェルギリウスの次の詩句を引いている。

Hei mihi! qualis erat! quantum mutatus ab illo

Hectore, qui redit exubias indutus Achillis

(*Aeneis*, II, 274-275)

「おお何というこのすがた！アキレウスが身につけた、武器を奪って身につけて、帰った時(や、プリュギアの、火焰を放って敵船を、焼いたとき)のヘクトルと、何と変わっていたことか。」(前掲邦訳書、98 頁)

527 行

cest astre inhumain

「この非道の星」は、536 行以下に見るように、時の教皇パウルス四世を指している。

529 行

J'ay veu Leon, delices de son aage

レオ十世(在位 1513-1521)は、ハドリアヌス六世(1522-1523)

をはさんで次に来るクレメンス七世（次注）と共に、メディチ家の出身である。「時代の喜び」という表現はスエトニウスのティトゥス帝についての言葉、〈*delicae generis humani*〉からきている。「（ティトゥスは）世界中の人々から慕われ喜ばれた。」（前掲邦訳書、294頁）レオ十世はロレンツォ・イル・マニーフィコの子でユマニストとしての教育を受け、ラファエロをはじめとする多くの文人、芸術家の保護者として知られる。

530 行 J'ay veu Clement de ce mesme lignage

クレメンス七世（1523-1534）。有名な1527年のローマの劫略（Sacco di Roma）の時の教皇である。

531-532 行 J'ay veu encor ce bon Paule ancien

Premier honneur du sang Farnesien

パウルス三世（1534-1549）。その即位によってファルネーゼ家に権勢をもたらした。

533 行 Apres cestuy j'ay veu Jules troisieme

ユリウス三世（1550-1555）。デル・モンテ家出身の彼は1551年からトレント公会議を再開したが、1552年に中断している。神聖ローマ帝国皇帝カール五世の側につき、仏王アンリ二世に敵対した。

534 行 Ores je voy le grand Paule quatrieme

パウルス四世（1555-1559）。前注の教皇との間にマルケルス二世の束の間の治世がある。この三代にわたる教皇の世をデュ・ベレーはローマにあって身を以て体験した。代表作『哀惜詩集』もこの『田園遊楽集』もその中で書かれたのである。『哀惜詩集』のあるソネで彼はユリウス三世とパウルス四世を比較している。

Ainsi la paix à Mars il oppose en un temps,  
Le beaultemps a l'orage, à l'hyver le printemps,  
Comparant Paule quart avec Jule troisieme.  
Aussi ne furent onq'deux siecles plus divers,  
Et ne se peult mieulx voir l'endroit par le revers  
Que mettant Jules tiers avec Paule quatrieme.

(sonnet 110, 9-14)

「かくして彼はたちまちに戦を平和に突き合わせ、  
嵐にうららかな晴天を、冬には春を突き合わす、  
教皇パウルス四世をユリウス三世に比べることで。  
かつてこれほど二つの世が異なっていたことはなく、  
一つの場所の裏と表をこれほど示すものはない、  
ユリウス三世の傍らにパウルス四世が並ぶほどには。」

好戦的なパウルス四世はカール五世を不倶戴天の敵として強硬な反スペイン政策を取った。カラールファ家の出身。

537-540 行

シャマルはパウルス四世の *motu proprio* (教皇自発教令, 署名だけで押印がない) を引用している。〈*De lenonibus eorum complicitibus, ultimi supplicii poena certis casibus in Urbe plectendis*〉

(ローマ市内において女衒行為を行いし者およびこれを幫助せし者は極刑を以て処罰すべし)

546 行

*L'amour de Ganymede*

男色。ガニューメデスはゼウスの寵童である。

547-548 行

*Ou sans cela ne sont que trop appris*

*Ceux qui ont loy de n'estre point repris*

これが教皇の甥で枢機卿のカルロ・カラールファを暗示しているという点でシャマルもソーニエも一致している。『哀惜詩集』で詩人はこの人物を揶揄している。

*Ascaigne, que Caraffe aymoît plus que ses yeux :*

*Ascaigne, qui passoit en beauté de visage*

*Le beau Couppier Troyenne, qui verse à boire aux*

[*Dieux.*

(*sonnet 103, 12-14*)

「アスカニオこそカラールファが 目より愛していたものを。

アスカニオこそみめかたちの 美しさでまさっていたものを、

天の神々に酒をつぐ トロイアの美貌の侍童にも。」

ここでもガニューメデスが男色の象徴として言及されている。叔父の権威をかさにきたカルロの悪行は当時輿論を買っていた。

549 行

*O temps! ô meurs!*

キケロの言葉で決まり文句になっている。

*O tempora! o mores!*

(*Cicero, Oratio in catilinam, I, i, 2*)

「おお時世よ、おお風俗よ」(前掲引用語辞典)

551-552 行

*N'estoit-ce assez, que le discord mutin*

*T'eust faict du monde un publique butin*

この詩集や『哀惜詩集』と共にローマ滞在の成果であるもう一つの詩集『ローマの古跡』は「夢」と題する付録編を持っている。その中で詩人はこれとほとんど同じ表現を使っている。ただ十音綴詩句の代わりに十二音綴詩句が用いられ、ローマは一人称になっている。

*N'estoit-ce pas assez que le discord mutin*

M'eut fait de tout le monde un publique butin  
(*Songe*, sonnet 10, 9-10)

「それでは報いが足りぬのか、はらから同士の争いが  
世界をあげての略奪にこの身をさらしたそれだけでは。」

エドアールの注に、〈*Sac et famine de Rome*〉（ローマの劫略と飢餓）とある。設定上、この遊女は1527年のSacco di Romaを「体験」したことになる。十二、三歳でこの道に入ったのがレオ十世の治世の始まる1513年のことと仮定すると、生まれたのが1500年頃。この詩をデュベレーが書いていたのはおそらく1555年か1556年であるから、この時には五十五、六歳という設定である。

555-558行

Si malheureuse encor tu ne perdois  
La liberté: liberté, que tu dois  
Plus regretter que tes palais antiques  
Dont nous voyons les poudreuses reliques.

デュ・ベレーは『ローマの古跡』の巻頭の詩「国王陛下に」でも、同じ表現、〈*les poudreuses reliques*〉を用いている。

Qui mis sous vostre nom devant les yeux publiques,  
Si vous le daignez voir en son jour le plus beau,  
Se pourra bien vanter d'avoir hors du tombeau  
Tiré des vieux Romains les poudreuses reliques.

(*Antiquitez de Rome*, Au roy, 5-8)

「その最良の日にかたじけなくも 御目の栄誉に与るなら  
御名の下に公に 現れんとするこの絵巻は  
おのが手柄と誇れよう、古き昔のローマびとの  
塵にまみれたなきがらを その墓場より出したるを。」

「塵にまみれた遺骨（なきがら）」とはユマニストの憧れてやまぬ古代ローマの貴重な形見であり、ほとんど聖なるものといえよう。風俗上の自由はそれ以上のものとこの遊女は訴えている。

559行

Fille, qui m'es plus chere que mes yeux  
「自分の目より大切な」という比較はすでに411行にも出ている。  
また『哀惜詩集』の中でもたびたび用いられている。一例を挙げると、

Toy, qui m'as plus aymé que ta vie et tes yaux,  
Toy, que j'ay plus aymé que mes yeux et ma vie.

(sonnet 51, 7-8)

「君は私を君の命よりもまた目よりも愛し、  
私は君を私の目よりも命よりも愛したのに。」